

成人看護学臨地実習中に学内学習を取り入れる ことの意義と成果の検討

畠山義子* 旗持知恵子* 小尾知子* 古屋洋子*
仲沢富枝* 登坂有子* 小野興子*

要旨

看護基礎教育における臨地実習は、学内で学んだ看護の知識を臨床の場において統合、応用しながら実践し、看護を学ぶ重要な教科として位置づけられている。学生は臨地実習において、一人一人主体的に考え行動し、看護職者としての判断力、実践力、問題解決能力を養うことになる。しかし、今日の臨床現場では高度医療に伴い患者は重症化し、急性症状を呈す場合が多い。また早期退院の方向から保健・福祉面では最新の情報が必要となる等学習現場として複雑となっている。そうした現場にあつて学生は、未熟な中に高度な技術を急速に、且つ適切に要求されている。そこで、実習効果を高めるために実習の中間期で学内実習を取り入れ実施した。これは実習に出向き看護がイメージ化されたところで、実習することの持つ意味を問い直し、自己における課題を解決することを目的とした。

学内学習の意義と成果を、学生からのアンケート及び教員からの意見を基に検討した。その結果、以下の事柄が明らかになった。

1. 臨地実習中間での学内学習は、今までの実習を振り返り、課題解決し、後期実習に臨めたとして、学生の約80%が有効であると評価した。
2. 看護技術の復習は実習に向けての不安解消につながり、臨地での体験への意欲につながった。しかし実施率は依然として低く、今後の臨地実習における技術教育のあり方を再検討していく必要がある。
3. 今回実施した学内学習の内容の一部を、臨地実習前に行っておくことは更に有効性を高める事が示唆された。今後は、臨地実習前に技術の復習を中心とする準備の為の期間を、さらに中間では前期実習中の振り返りと生じた課題解決の時間を設けるなどして、学内学習と臨地実習を連動させて有機的効果を得ていくことが有効と考える。
4. 教員は、学内学習の学びを想起させ、臨地実習で役立てていけるよう、また、一人で技術を提供することに自信のない学生に対しては、必要時学内で学習を補ったり、サポートして実施していけるような関わりの重要性が示唆された。

キーワード：臨地実習 学内学習 成人看護学実習

I. はじめに

看護基礎教育における臨地実習は、学生が既習の知識・技術を基に対象に対し援助行為を展開し、看護を修得する重要な教科として位置づけられている。学生は一人一人主体的に考え行動し、看護職者としての判断能力、応用能力、さらに問

題解決能力を養う場である。しかし、今日この臨地実習指導における課題は多い。中西は、現代青年像について諸論者の言を用い「自我の心理的社会的成長の遅れ」を指摘し、実習現場における学生達の問題をあげている¹⁾。関わる教員も、学生の捉えた情報の統合・判断・応用していく事の困

難性と、看護に必要な対象の機微な感情を理解することが苦手な傾向を常日頃、指導を通し感じている。加えて、今日の臨床現場では高度医療に伴い患者は重症化し、急性症状を呈する場合が多く学生は急激で早急な展開の医療・看護の場に遭遇している。また、長期入院の是正に伴い早期退院の方向にあり、保健・福祉の面での最新な情報を基に適切な援助が要求されている。こうした現場での学習は、学生にとって未熟な中でより高度な技術を求められることになり、効果的な臨地実習のあり方の検討が必要とされる。

さらに、近年のカリキュラム改定に伴い、臨地実習時間は徐々に短縮され、短い臨地実習での学びを、いかにして最大効果を得るかの方策を考えることが要求されている。今回、臨地実習の効果を高める為に、臨地実習の中間期に学内学習を取り入れ展開した。

臨床実習の課題の取り組みとして学内実習を取り上げた報告は、理学療法実習において1例あるが、看護学実習では見当たらない。本報告では、臨地実習の前期と後期実習の中間期に学内での学習期間（以下、学内学習）をとり入れ、前期実習からの課題解決のための学習を行った事の意義とその成果を明らかにし、今後の学内学習のあり方を検討する。

学内学習で取り上げた看護技術は、診療の補助技術の一部とコミュニケーション技術であったが、本文中の看護技術は、前者の臨床で看護に必要な基本的診療補助技術をいう。

II. 成人看護学臨地実習及び学内学習の概要

1. 成人看護学臨地実習の概要

表1 学内学習日程

実施日	A M (180 分)	P M (180 分)
1 日目	『患者－看護婦関係』	『医療・福祉の連携』
2 日目	『成人看護実施施設の見学実習』	
3 日目	『医療過誤』	『技術演習』
4 日目	『施設見学発表会』	『がん看護』 『ホスピスケア・がん看護の米国事情』

成人看護学臨地実習は、成人看護学概論、成人臨床看護論で学修した看護に関する諸論をふまえ、成人期における対象特性、健康特性、さらにあらゆる健康レベルに対応した看護が実践できることを目的として行う。8単位ある臨地実習期間は、前期4単位（成人看護学臨地実習Ⅰ）、後期4単位（成人看護学臨地実習Ⅱ）に設定し、一人の患者を受け持ち看護論を活用した看護過程の展開を中心に実施している。受け持つ対象の選択では、成人期にあり、可能な限り異なった発達段階や健康レベルの患者を受け持てるよう配慮し、また、他の看護学で学んだ内容と重複しないよう、疾患や治療方法が偏らないように考慮している。看護技術に関しては、受け持つ患者に必要な看護技術全般に対し“一人でできる又は援助をうけてできる”ことを目標に実習を行う。従って、高度な技術においても指導を受けながらなるべく実施できるようにしている。また、病院における実習のみでなく、広く成人看護の機能する場を見学し、成人看護の対象、目的、方法、看護の広がりや継続性の理解を深めるため、各専門施設（ホスピス、障害者センター、学校、企業）の見学実習を学内学習に位置づけ、後期実習に役立てている。

2. 学内学習の概要

学内学習の目的は「前期臨地実習の体験をもとに自己の課題を明確化し、自己を振り返り新たな知識の修得、技術の復習等を行い後期実習に役立てる」ことである。

臨地実習中生じる学生の課題は日々カンファレンスを行い、各個人で、またはグループ毎に解決をしているが、学生に共通する課題内容を取り上

表 2 学習のねらいと具体的展開

患者—看護婦関係	学習のねらい ①前期実習で体験したコミュニケーション場面の振り返りにより、患者—看護婦関係におけるコミュニケーションの意味や患者理解について考えることができる ②自らの体験を討議し合うことにより、傾聴し共感することへの問い直しと、患者と対峙する時の自己のありようについて考えることができる
	展開：事前に事例提供者である学生と事例の状況を把握している指導教員が実施する2つのロールプレイ場面を観察後、提供された事例および自己の学習体験をふまえてグループディスカッションを行い、患者—看護婦関係におけるコミュニケーションのあり方を検討した
医療福祉の連携	学習のねらい 病院で治療やケアを受けていた対象が地域—家庭への療養に移行するにあたり必要となる保健・医療・福祉との連携とその調整について理解する
	展開：実習病院のMSWによる社会資源・社会制度についての最新の現状の講義を行い、学生が実習において体験した事例（高齢の患者の年金や介護保険への適応、リウマチ患者の障害年金、医療費に関する援助が必要だった事例）を中心に具体的援助のあり方について説明した
がん看護	学習のねらい ①がん患者における最新の化学療法、放射線療法時の看護を理解する ②がん看護とそれに関連した終末期ケアに関して新たな知見を広め、後期実習に役立てる
	展開：①がんの病理解明の歴史的展開から今日のがん治療について ②化学療法、放射線療法の歴史的展開から最新の薬剤、使用方法等の実際、 ③化学療法時の看護婦としての注意事項とその対策 ④米国における終末期ケア、がん看護について、スライドをもとに講義を行った
医療過誤	学習のねらい 対象の人権を守ることが看護の基本であり、あらゆる看護の場面でおこりうる危険性に気づくためには専門的知識、確かな援助技術の習得、コミュニケーション態度（感性も含む）が必要であることを理解し、後期の実習に臨むことができる
	展開：①前期臨地実習における体験の中で、ヒヤリ・ハットした場面を各自記入し事前に提出してもらい、その中のいくつかの場面を取り上げ、対象の安全を脅かす事態へ発展する可能性のあることを気づかせ、対処方法を説明した ②これまでの医療（看護）過誤事例をとりあげ、看護婦（士）の法的責任について、講義を行った
技術実習	学習のねらい 前期実習の中で感じた、看護技術に関する曖昧な知識を確認・補充し、後期実習に向けて実際的な学習を行い、後期実習に役立てる意識が持てる
	展開：技術内容については学生自身の必要性和、前期実習の状況をふまえ教員が必要と判断した内容を統合して検討した結果、表3のように設定。実施はなるべく全員が実施できるよう、技術項目を3パートとし、学生を3グループに分けローテーションした
施設見学	施設見学実習のねらい ①成人看護の活動の場を広く見学することにより、成人看護の目的・対象・方法を統合し、看護の継続性について理解する ②発表会をとoshi、各施設での看護の内容を共有する
	展開：学域（大学、高校）17名、職域（企業）35名、成人対象の知的障害者施設23名、及びホスピス病棟25名の各施設に分かれて半日から一日の見学実習を行った。見学後発表会を行い学習内容の共有の機会とした

表3 技術実習

技術の項目	具体的内容	方 法
・輸液・ドレーン管理に必要な技術	・排液ドレナージ中の観察 ・輸血時の管理・観察技術 ・中心静脈栄養の管理	・血液製剤についての種類、保存方法、輸血マニュアル表などについての講義 ・中心静脈栄養の目的管理上の注意点についての講義と滴下数の算出の実践 ・ドレナージ中の観察の要点について講義
・筋肉注射の技術	・手術前投与薬のための筋肉注射の実際	・3事例の中から指定された事例について部位の選択、準備と後始末、注射時の観察などの一連の援助技術について患者－看護婦の役割をお互いに交代し、学生同士で実践する
・呼吸・循環管理に必要な技術	・心電図のモニタリング・呼吸音の聴診	・心電図の原理、不整脈の見方の講義、12誘導、3点誘導心電図装着の教員によるデモンストレーション後の学生同士の実施 ・呼吸音聴診の方法の講義と正常な呼吸音の学生同士による聴取。シュミレーションを使つての異常な呼吸音の聴取の実習

げ全員を対象に行うことにした。

学生から取り上げられた前期実習での課題と、担当した教員からの課題を統合すると次の5項目にまとめられた。①患者との対応の戸惑いから、コミュニケーションをふまえた患者－看護婦関係の振り返りの必要性。②受け持つ患者の看護の特殊性から、退院指導に必要な医療・福祉の施策に関する学習。③がん患者の化学療法・放射線療法時の看護。④看護技術実施時の注意を促すために医療過誤の講義の必要性。⑤看護技術の復習の必要性。その内、学生からの要望は①と⑤に集中した。さらに成人看護の対象・目的・方法、看護の広がりや継続性の理解を深めるために病棟以外の成人看護の機能する場を見学し（以下、施設見学）後期実習に役立てることにした。これら6項目を学内学習項目とした。

学内学習日程は表1のとおりであり、学内学習項目毎のねらいと具体的展開は表2、表3のとおりである。

Ⅲ. 研究目的

成人看護学臨地実習の効果を高めるために、前期実習で生じた課題を解消し後期実習に臨めるよう、中間期に実施した学内学習の意義とその成果を明らかにし、今後の学内学習への示唆を得る。

Ⅳ. 研究方法

1. 調査対象：平成12年度学内学習を履修した短期大学部5回生98名
2. 調査方法：質問紙法（一部自由記載）
3. 調査時期：平成12年7月と12月
4. 調査内容：

1) 学生に対し(1)及び(2)のアンケート調査

(1)学内学習直後（7月調査）

①前期実習期間中の学内学習項目の実施の状況と技術実施時の心境

②学内学習で学びとなった点、今後に活かしたい点

③今回の学内学習を終えての意見

(2)臨地実習終了後（12月調査）

①学内学習項目に関連した機会の有無と学内学習での学びの活用状況、技術に関しては実施時の心境

②全実習を終えて中間期で学内学習を行った事への意見
5. 分析方法

1) 学内学習直後、及び臨地実習終了後に行った学生のアンケート結果から、学内学習の学びの効果と有効性を把握する

2) 学内学習の効果と有効性について学内学習項目・時期・方法の適切性について分析し、臨地実習と学内学習のあり方と課題を明らかにする
- なお、学生にはアンケート調査時に、学内学習

の効果を把握し、今後の教育に役立てることを目的として実施することを説明し協力を求めた。また、調査協力に対し実習成績とは関係ないことを付け加え、提出はボックスを設け、留め置き法とした。

V. 結果

1. アンケート結果

学生に行った学内学習直後のアンケート回収は89名（回収率90.8%）、臨地実習終了後のアンケート回収は79名（回収率80.6%）であった。

2. 実施直後の学生の反応（学びになった点、今後活かしたい点）

1) コミュニケーションを主とした「患者－看護婦関係」

学生の主な意見：沈黙の時間の大切さ、沈黙の意味、相手の思いを考えることの大切さがわかった（13名）。プロセスレコードをとることで自分の対応が良かったか否か明確に出来る。今後プロセスレコードをとり検討していく必要性がわかった（10名）。患者を理解するということは、患者がその場で何を考え何を思っているかということと言葉を通じて、また非言語的コミュニケーションを通してわかること（4名）。傾聴することの重要性がわかった（4名）。患者主体の関係であることが共感につながることを忘れてはならない、等であった。

（なお、（ ）内は同義の意見を述べた学生数を示す。次項目以下、同様である）

2) 医療・福祉の連携

学生の主な意見：臨床の看護婦が広く医療・福祉に関する知識を持つことは、患者の退院後のQOLを高められることに結びつく（9名）。在宅にまで目を向け、退院時に地域看護との連携を図ることの重要性を再認識した（8名）。医療従事者間での調整という役割をもっている看護婦として、連携を取ることの大切さが分かった。今後、積極的に病院内のMSWに相談していこうと思った（7名）、等であった。

3) がん看護

学生の主な意見：化学療法や放射線療法について改めて学びが深まった（13名）。説明を十分行い、患者の苦痛や不安を軽減できる関わりを行っていききたい（8名）。精神的サポートの重要性、治療の副作用に対する援助が理解できた（5名）。励ましよりも共感が患者の支えになることの重要性を学んだ（5名）。年々治療も進歩し、治療に伴う苦痛の軽減も出来るようになってきていることを知った。

米国の終末期ケア・がん看護についての受講直後の学生の主な意見：主体的に余命を生きている患者の姿や、患者や家族に関わる看護婦の姿に学んだ（10名）。ボランティアの多さ、研修のあり方など学ぶ点が多い（8名）。海外の進んでいるところは積極的に取り入れて行くべきである（8名）。生活感あふれる環境で過ごすことにより患者の心は癒される（4名）。国全体ががん看護やホスピスケアについて認識が高く、システムが充実している（5名）。ホスピスケアについて難しさ、明るさを感じた（3名）。日本と米国との違いがわかった。今後、日本に於けるホスピスケアを追求していきたい、等であった。

4) 医療過誤

学生の主な意見：自覚と責任を持ち、曖昧な知識ではダメだと強く感じた（11名）。確認の必要性を再認識した（11名）。慣れや略す事で確認の不充分さや思いこみが生じて医療事故につながる。何度も確認することが必要（11名）。これまでより注意を払って演習を行うようになった（11名）。自分がこれから遭遇するかもしれない事故の状況を知ることで、今後注意するポイントを頭に入れながら緊張感を持って演習をした（8名）である。

5) 技術実習

学生の主な意見：もう少し一人一人で行える時間が欲しかった（7名）。注射の薬液の確認は何度も声を出し合って略さず確認し実施した（11名）。筋肉注射や心電図などは実習が始まる前に

表 4 後期実習へ向けての取り組み n=89 人 () 内は%

技 術 項 目	積極的に実施したい	不安がある	NA
排液ドレナージ	68 (76.4)	11 (12.4)	10 (11.2)
IVH管理	61 (68.5)	23 (25.8)	5 (5.6)
筋肉注射	69 (77.5)	16 (18.0)	4 (4.5)
呼吸音の聴診	67 (75.3)	10 (11.2)	12 (13.5)
心電図のモニタリング	61 (68.5)	26 (29.2)	2 (2.2)
輸血管理	57 (64.0)	29 (32.6)	3 (3.4)

して欲しかった（3名）。技術項目をもっと増やして欲しい（3名）である。

後期実習に向けての取り組みについて、積極的に実施したいか、不安があるかを聞いたところ表4のとおりであった。

6) 施設見学

学生の意見：学域（高校）では、精神的に極めて不安定になりやすい年齢にある生徒達に寄り添い、気持ちを理解しようと努力する養護教員から、今日の学校が抱える種々の問題解決に努めている姿を学んだ。職域では、仕事の内容と密着しながら健康の維持・増進という側面から、業務に起因する健康障害を予防すること、働く人の健康と労働の調和を図る関わりをしていた。知的障害者授産施設では、利用者の環境に気をつけ最良の健康状態で生活が送れるよう、個々に応じた健康保持の援助に務め、疾病の予防・早期発見を目的とした各種検診を実施し、早期治療に努めている看護婦の役割を理解した。ホスピス病棟を見学した学生からは、対象の特徴をふまえた病院環境の工夫や看護婦としての姿勢を学んだ。看護婦は逃げずに患者と向き合い、患者と共に悩み、真剣に向かい日々努力している姿から、自己の死生観を確立して今後、看護にあたりたい、等の意見があった。

3. 前期実習と後期実習中の実施数の変化、及び後期実習における学内学習の効果

1) コミュニケーションを主とした「患者－看護婦関係」（表5）

「患者－看護婦関係」に戸惑った割合は、前期実習期間では76名（83.1%）だったのに対し後期はやや減少し、戸惑いを体験した59名（74.7%）の内、39名（66.1%）は学内実習の学びを活かしたとしている。学内学習の成果が伺えるが、活かせなかったとする者は19名おり、その理由は演習の事例とは疾患もおかれている立場も違う、余裕がなかった、忘れてしまった、等であった。

2) 医療・福祉の連携（表5）

前期実習中に受持患者に対し、医療・福祉に関連した働きかけを行った者は22名いた。また、今回の学びの内容を知っていれば活かすことが出来た場面があったと回答した学生は44名いた。後期実習で「医療・福祉に関連した働きかけ」を行ったものは27名（34.2%）おり、その内17名（63.3%）の学生が学びを活かしたと回答している。

3) がん看護（表5）

前期実習においてがん患者を受け持った学生は48名（53.9%）いた。後期実習で「がん患者を受け持つ機会」は40名（50.6%）おり、その内23名

表 5 体験者数と後期実習において学内学習の学びを活かしたか否かの割合 人 () 内は%

体 験 内 容	前期実習 体験者数 n=89	後期実習 体験者数 n=79	後期実習での活用状況		
			活かした	活かせなかった	NA
「患者－看護婦関係」の戸惑い	76 (83.1%)	59 (74.7)	39 (66.1)	19 (32.2)	1 (1.7)
医療・福祉に関連した働きかけ	22 (24.7%)	27 (34.2)	17 (63.0)	8 (29.6)	2 (7.4)
がん患者を受け持つ機会	48 (53.9%)	40 (50.6)	23 (57.5)	12 (25.0)	5 (12.5)
終末期の患者を受け持つ機会	12 (13.5%)	6 (7.6)	4 (66.7)	1 (16.7)	1 (16.7)

表6 技術を実施した割合 前期 n=89 後期 n=79 人 () 内は%

技術項目	〔前期実習期間中〕			〔後期実習期間中〕		
	実施者	機会なし	NA	実施者	機会なし	NA
排液ドレナージ	20 (22.5)	65 (73.0)	4 (4.5)	11 (13.9)	66 (85.5)	2 (2.5)
IVH管理	9 (10.1)	72 (80.9)	8 (9.0)	9 (11.4)	58 (73.4)	12 (15.2)
輸血管理	2 (2.3)	80 (89.9)	7 (7.9)	8 (10.1)	67 (84.8)	4 (5.1)
筋肉注射	7 (7.9)	68 (76.4)	14 (15.7)	8 (10.1)	63 (79.7)	8 (10.1)
呼吸音の聴診	36 (40.4)	49 (55.1)	4 (4.5)	51 (64.8)	23 (29.1)	5 (6.3)
心電図のモニタリング	9 (10.1)	79 (88.8)	1 (1.1)	15 (19.0)	60 (75.9)	4 (5.1)

表7 前期実習、及び後期実習における技術実施時の学生の反応 人 () 内は%

技術項目	〔前期実習〕				〔後期実習〕			
	体験者数	不安・混乱・困った	落ち着いて出来た	NA	体験者数	不安・混乱・困った	落ち着いて出来た	NA
排液ドレナージ	20	12 (60.0)	2 (10.0)	6 (30.0)	11	5 (45.5)	6 (54.5)	0
IVH管理	9	6 (66.7)	2 (22.2)	1 (16.7)	9	6 (66.7)	3 (33.3)	0
輸血管理	2	1 (50.0)	0	1 (50.0)	8	5 (62.5)	2 (25.0)	1 (12.5)
筋肉注射	8	6 (85.7)	2 (28.6)	0	8	5 (62.5)	3 (37.5)	0
呼吸音の聴診	36	23 (63.9)	9 (25.0)	4 (11.1)	51	17 (33.4)	32 (62.7)	2 (39.2)
心電図のモニタリング	9	7 (77.8)	0	2 (22.2)	15	7 (46.7)	8 (53.3)	0

(57.5%)のものが、また「終末期の患者を受け持つ機会」があったものは6名(7.6%)、その内4名(66.7%)のものが、学内学習での学びを活かしたとしている。しかし、活かせなかったものもあり、理由として両方とも、覚えていられなかった、忘れていた、また、がん患者への応用にも、告知されていない患者だったので具体的に援助できなかった、とする意見が殆どであった。

4) 技術演習

実際に技術を実施した学生の状況をみると表6のとおりであった。前期実習で「呼吸音の聴診」は半数近い学生が実施しているのに比べ、他の技術の実施率は前期実習、後期実習とも低い。実施できなかった理由のほとんどが、機会がなかったというものであった。実施時の学生の反応は表7のとおりであり、前期実習では不安や混乱、困った気持ちを抱きつつ、どうにか行えたという割合が多いのに対し、後期実習では技術実施に際して落ち着いて出来た、とする割合が高くなっている。

4. 学内学習全体に対する学生の反応と意見

実習中間期に行った学内学習について、臨地実

習終了後での学内実習に対する意見を学生に求めたところ、有効だったとする者62名(79.5%)、どちらともいえない4名(5.1%)、課題を残す12名(15.4%)であった。主な意見は、表8の通りである。

Ⅵ. 考察

1. 学内学習の効果と有効性

看護学実習評価を効果的なものとするためには、学習者に対するフィードバックの提供、すなわち形成評価に焦点をあてた評価活動を展開する必要がある²⁾。フィードバックとは結果に対する情報を得ることであり、その中には、学生の行動に対する具体的な情報が含まれ、それが学生にとって、今後の実践を改善し、知識・技能の向上をはかる為の指針となる。臨地実習中においては、当然可能な限り学生個々に対しフィードバックを行い実習目的達成への努力を行っている。今回、行った学内学習は、更に1週間の時間を設け全員に対しフィードバックを行う機会を設けた事になる。

1) 学内学習内容・時期・方法の適切性

学生は学内学習について、前期実習の問題が解

表 8 学内学習の有効性について * 多数意見

◇有効だったとする意見 (62名) 内容に関するもの * 実習中に疑問や不安が実感されていた事なので良かった ・ 振り返り、自分に不足している部分が多く、勉強の必要性を感じた。 ・ 講義の内容は充実していて良かった。盛りだくさんで興味深かった。関心を持てた。 ・ とても良かった。前期とは違った思い (自信など) で後期実習に臨めた。 ・ 産業看護の見学では病院と違った場所での看護の役割や仕事の内容を学べ、人々の健康を守るために看護の果たす役割は大きい事を知った。 ・ 「患者－看護婦関係」のディスカッションの後のコミュニケーションについての話し合いは印象的だった。実際にみんなが自力で考えその中で発見し、助言してもらうと学習としてとても実を結ぶし、次の実習への方向づけとなった。 ・ やはり自分達が主体性を持って学ぶ必要性も学んだ。 ・ 後期の実習では、患者の状態だけでなく精神面の関わりが出来たと思う。戸惑う時や、患者の気持ちを受け止めるときに学内実習で学んだことが役だった。 時期に関するもの * 前期の実習を終えていたので話が分かりやすく自分の問題点を明らかに出来、後期に役だった。 ・ 実習をして困ったことなども出てくるため、中間で行うことは効果的である。 ・ 実習の中間であることから、実践に向けてということを意識して行えた。 ・ 前期に実習で機会が得られなかった技術については、不安が軽減された。 ・ 後期の実習では疾患の重症な人、予後の短い人に接する機会が多いうように感じ、その為、こうした学内実習を「実習の中間」に行うと気持ちにもゆとりが持てるし、自分の行った看護をフィードバックさせて欠陥点を見つけられる為、後期に活かせる部分は大きいと思った。
◇どちらともいえないとする意見 (4名) ・ 実施する機会がなかったの、何とも言えない。受け持っていたら役立てられた。
◇課題を残すとする意見 (12名) 内容に関するもの ・ 技術演習をもっと行いたかった。 ・ 実施が少なすぎる。100名いると効率が悪い。教員の指導も行き届かない。 ・ 講義は興味深いものだったが、たて続けだったので、集中して聞けなかった。 ・ もうすこしゆっくり説明を聞き、一人一人やってみたかった。 ・ 中身の濃い一週間だったが慌ただしかった。過密スケジュールすぎる。 ・ もっとじっくり他の学生と話し合える時間が欲しかった。 時期に関するもの ・ その時は覚えていても、実習まで時間があつたこともあり忘れてしまった。 ・ 前期実習スタート前に行っても良いと思う。3年次の実習スタート時にはあらゆる不安 (一方で期待) があるため、興味を持って学べると思う。また、春休み後、実習に向けて生活リズムの調整としても直前に行っても良いと思った。

決された、時期としてよかった、内容にも興味が持てた、技術実習も後期の実習に活かせた、という意見に集約されるように、有効であったと80%近くが評価していた。

有効とする要因は、前期臨地実習直後に実習期間中の個々の課題を取り上げ、解決していった学内実習項目が適切であったことが大きいといえる。今回の学内学習項目の決定には学生から意見を求めたこと、及び、関わる教員が学内学習を視野に入れて臨地実習指導を行った結果、学生の課題として認識する内容を取り上げた。従って、学

内学習項目は前期実習から明確になった学生の後期実習に対する課題であったといえる。

(1) 学習内容

多くの学生が必要とした「患者とのコミュニケーション」の検討は、臨床に出て始めて患者と長期に関わったことから明らかになった課題であった。話し合いの中で、学生は共感の意味の理解、患者の側に立つことの難しさを実感し、また、学生同士で話し合うことで悩んでいたのは自分だけではなかった事の気づきや今後への対応策が考え

られたことは、学生にとって今後に向けての不安の軽減となり勇気づけにつながった。また、プロセスレコードを記載し看護婦である自分自身が自らの感情に気づき吟味することの重要性など、コミュニケーション技術の5要素³⁾の中の傾聴能力、感情の適切な取り扱いの重要性を主に学んだ。

「医療・福祉の連携」については、近年、慢性疾患の増加により在宅療養者が増えていることや、ケアの対象者である個人の価値観やヘルスケアニーズの多様化により、それまでケアの中核をなしてきた病院などの医療施設から地域、家庭へと療養環境の拡大が図られている。また、入院期間の短縮化に伴い、早期退院する患者が多くなっていることから、社会資源の活用をふまえ早期社会復帰への指導の重要性があげられる。そこで、実習病院の医療ケースワーカーに講師を依頼し、最新の社会資源・社会制度の講義を行い、学生より提出された前期実習中に体験した事例(3事例)を中心に援助のあり方について説明した。学生が実際に実習において体験した事例を中心に学習したので、多くの学生が興味や関心を持ち、また、漠然とした保健・医療・福祉の連携の必要性という知識から、より具体的かつ実的な活用状況を知る事で活用可能な実践知と成り得たと考える。

「がん看護」について、学生は、実習期間中がん患者を受け持つ機会は多く、手術療法と共に化学療法、放射線療法が行われ、がん特有な治療に伴う看護が要求される。当成人看護学においては「がん看護」という独立した単元はなく、成人臨床看護論「治療困難な状態にある患者の看護」でがん患者の事例を中心に教授している。しかし、その主たる構成は、治療困難となった状態への看護であり苦痛の軽減や終末期ケアに重点が置かれている。がん看護は、特有な治療を行い治療を目指すものであり終末期看護に属するものではない。従って、更に最新の化学療法、放射線療法時の看護を中心に、がん看護専門病院の看護婦から最新のがん治療の現状についての講義を実施した。また、がん看護とそれに関連した終末期ケアに関して新たな知見を広めるために、当講座の教員が視

察してきた米国における終末期ケア、がん看護についてその実状を紹介した。その結果、米国の看護に対するレベルの高さに驚き専門職として意識を高くもつ必要性を感じ、さらに、患者だけでなく家族を含めた単位でケアにあたっている実態や、副作用の脱毛に対するかつらの貸し出しなどは人権を尊重するアメリカの実状として理解し学んでいかなければならないと受け止めていた。また、施設見学でホスピス病棟を見学している学生は構造上からその違いが理解でき、ホスピス病棟ではその人にとっての日常性を尊重することが最重要課題であり、看護婦はその環境を造り守り続けることが使命であると理解できたと環境の重要性を認識した。

「医療過誤」の講義は、近年、多発する看護・医療事故に対し国民の不安・不信が高まり、看護職としての専門性や倫理性が厳しく求められている中であって、増える医療過誤訴訟件数⁴⁾の現実を認識し、臨床のみならず基礎教育で取り上げる必要性はあった。事前に実習中に感じた「ヒヤリ・ハット」体験を学生より提出させたところ、実施した看護場面や病室環境の中で、“危ない”“医療事故につながる”と自覚した場面が61場面抽出された。抽出された場面を基に説明を行ったことから、学生は自己の前期実習での行動を振り返り、医療過誤の危険性やその予防について再認識する機会となった。翌日実施する技術演習へ意識づけられるよう展開したことで、効果はさらに上がったと考える。

「技術実習」に関して、学生は、2年次後期の成人臨床看護論において呼吸循環に関する技術(心電図の装着・循環管理の方法・聴診の技術・救急蘇生法等)、意識障害のある人の援助技術(観察・気管切開・経管栄養に伴う技術)、糖尿病でインシュリン療法を行っている患者の援助技術(インシュリン注射を行う患者への指導案作成)、術前術後に必要な援助技術(術前オリエンテーション・剃毛・術創管理、等)の学内技術演習を行っている。従って今回の技術実習の内容は2年次の学内技術演習の内容を想起したり、経験知を積み上げることが出来るように組み立てた。学生か

らの要望では、注射・採血の技術や術後の管理に関連する輸液・ドレーンの管理、他の復習があげられた。技術項目は学生の必要性と前期実習の状況をふまえ教員が必要と判断した内容を統合して検討した結果、表3のように設定し実施した。どの技術場面においても真剣に取り組み、時間の許す限り学生は実施した。実施後の学生の意見では基礎看護技術の復習となり、後期実習に向けての取り組みについて学生に聞いたところ70～80%近い学生が積極的に実施したいと意欲を示した。しかし、輸血管理やIVH管理、心電図のモニタリングの実習には不安があるとした学生の割合が他の技術項目に比べて高く、心電図の読解など難易度が高い項目の不安が高くなっている。実習する技術項目の内容を精選し、十分な時間のなかで展開していく事が重要となる。

「施設見学」について、見学施設の決定は学生の希望をとり調整している。また、看護研究で関連したテーマを持つ者はさらに優先し決定しているため、見学を楽しみにしている学生が多く、積極的姿勢で臨んでいる。また、見学してきた各施設での成人看護の実状を報告した発表会では、意見交換をとoshi、各々の対象特性と健康特性をふまえた看護が展開されている実態を理解し、成人看護の役割について理解を広めることができたと考える。更に、時間が短すぎる、見学だけでなく体験も行いたい、とする要望も多くあった。

学生及び教員が課題と認識した学内学習項目の中で学生は、積極的、且つ熱心に取り組んだ結果、学生の反応では、前述したように80%の学生が有効性につながったと考える。

(2) 実施時期

学生は、臨地実習直後であった為自らの体験に結びつけ易く、結果的に発展・統合して考えられ、また、復習を行い結論を得たことで、後期実習に向けて自信を得ることができたといえる。しかし、学生の意見の中には、実習前に実施して欲しいとする内容もあった。今回実施した「医療・福祉の連携」の講義内容を知っていれば、働きかけを行ったものも含めると、前期実習で66名(74.2%)

が看護に活用していたことになる。また、多くの学生が関わる「がん看護」等の専門性を深めた講義は、臨地実習前での実施が有効と考える。看護技術についても、臨地実習前に復習を行い自信を持って臨みたいとする意見もあった。これらから、今回実施した学内学習の内容の一部は臨地実習前に行うことで、更に臨地実習の効果を上げることができると思う。

(3) 実施方法

多くの学内学習項目において一斉学習の方法をとることから、なるべく自分の課題と認識し臨める展開となるよう心掛けた。従って、取り上げる課題は学生の体験した具体的な場面や内容として学生から提出を求め、一方的な講義形式でなく、なるべく討議場面を設けるよう展開した。学生に対しては、この期間内で前期実習からの課題を解消する努力を意識づけた。その結果、学生の意見から、中身の濃い1週間だった、慌ただしかったが学びが多かった、とする意見が聞かれている。しかし、一人一人やってみたかった、とする技術や、グループディスカッションではもっとじっくり他の学生と話し合える時間が欲しかった、等の意見もあり、これらの意見は学内学習の意義とも関連するため、今後の学内実習方法で検討する重要な点と考える。

2. 臨地実習と学内学習のあり方と今後の課題

臨地実習の意義は、理論の学習を統合し実践へと反復体験を通して学びを得ていくところにある。今回、8単位の臨地実習期間の中間に、学内学習期間を1週間設け、一斉に反復体験を行った。その結果、臨地実習効果を高める一方法としての成果と有効性が示唆された。さらに内容と時期を考慮することによってさらに有効となることも示唆された。つまり、前期臨地実習の前、中間期、臨地実習終了後などに学生のレディネスを考慮して内容を設定していくと、更に臨地実習の効果を上げることができると思う。

臨地実習と学内学習のあり方として、前期臨地実習前学内学習は準備期間と位置づけ技術の復

習、カリキュラムからの補講等を行い、学生が抱く臨地実習にむけての不安を解消して臨めるようにする。中間期の学内学習では前期実習で生じた課題の解決を行う。この期にあっては、実習に向き、看護のイメージを体験することにより、さまざまな課題が生じると考えられる。そうした課題に対し個々に対応した学内学習期間であることが望ましい。ゆっくり振り返り、じっくり復習する期間が必要と考える。また、臨地実習を終えた時点では全実習を振り返り、まとめの期間をもうけ実習の成果と看護者としての課題を明確にする。このように学内学習と臨地実習を連動させることで、学びをさらに深めていくことができると考える。さらに、今回課題として残された実施方法も、前期実習前学内学習時間を設け、学習内容を分散することで解決に向かうと考える。

しかし、臨地実習効果を最も高める要因には、学生にとって実習から生じる課題に対し、適切な学習や復習がタイムリーに行えることにありと考える。教員は学生のレディネスを把握し、臨地実習中でも必要時学内に戻り、学びを深められる様な柔軟な指導、対応を行うことが臨地実習の効果をさらに高めることになる。今回の学内学習の効果について学生は、忘れてしまい活かせなかったとする者もいた。教員は、学生に今までの学内での学びを想起させ臨地実習で役立てていけるよう、また、一人で技術を提供することに自信のない学生に対しては、必要時学内で学習を補ったり、サポートして実施できるような関わりの重要性が示唆された。

VII. 結論

1. 臨地実習中間で行った学内学習は、それまでの実習を振り返り、課題解決し後期実習に臨めるとして、約80%の学生が有効であると評価した。
2. 看護技術の復習は後期実習に向けての不安解消につながり、臨地での体験への意欲につながった。しかし、臨地での実施率は依然として低く、今後の臨地実習における技術教育のあり方を再検討していく必要性がある。
3. 今回実施した学内学習の内容の一部は、臨地実習前に行っておくことで更に有効性を高めることが示唆された。今後は、前期臨地実習前に技術の復習を中心とする準備の為の期間を、さらに中間では前期実習中の振り返りと生じた課題解決の時間を設けるなど、学内学習を臨地実習と有機的に連動させて効果を得ていくことが有効と考える。
4. 教員は、学内学習を想起させ臨地実習で役立てていけるよう、また、一人で技術を提供することに自信のない学生に対しては、必要時学内で学習を補ったり、サポートして実施できるような関わりの重要性が示唆された。

VIII. 終わりに

近年、看護カリキュラムは看護教育内容の増加から、臨地実習時間の短縮を余儀なくされてきている。教員は、短縮された実習時間内でより効果的な方策を得ていかねばならない。今回、臨地実習と学内学習時間とを連動させた方法を試み成果を得ることが出来た。今後も学生にとって、ダイナミックに学習の積み重ねとして実感し実践知が得られるよう、さらに学内学習を含めた臨地実習のあり方の検討を重ねていく必要がある。また、教員として常に自己の実践能力の開発に努め、的確な判断力を備えた質の高い実践能力をもつ看護職者の育成を目指していきたいと考える。

引用・参考文献

- 1) 中西睦子：臨床教育論―体験からことばへ―ゆみる出版、p58、1996.
- 2) 舟島なおみ 監訳：看護教育に於ける講義・臨床・実習の評価、医学書院、p196-198、2001.
- 3) 武藤 隆、他：発達心理学入門Ⅱ 青年・成人・老人、p73、東京大学出版会、1995.
- 4) 深谷翼：看護事故の法的責任、日本看護協会、p11-12、2001.
- 5) 舟島なおみ：看護教育学研究の成果に見る看護学実習の現状と課題、Quality Nursing 7(3)6-14.2001.

- 6) 中西陸子,他訳:看護学教育のステトラジー、医学書院、1993.
- 7) 佐藤紀子:実習教育のあり方を見直す—医療現場は大きく変わってきている—、看護教育、40(12)1038-1044、1999.
- 8) 高田利武:自己形成の心理学、川島書店、1995.
- 9) 正木治恵他:4年生大学における看護技術教育の在り方、看護教育、4(9)、734-741、2000.
- 10) 池田俊子他:看護教育カリキュラム別の基礎技術修得度の変遷、日本看護学教育学会誌、8(1)、51-62、1998.
- 11) 高橋照子、筒井真優美:教育機関を越えた看護教育者の資質発展プログラム—看護技術の教育方法、日本看護教育学会第11回学術集会講演集、217、2001.
- 12) 新道幸恵:ユニフィケーション導入のいきさつと準備、看護教育41(7)、497-496、2000.
- 13) 村田豊久他:コミュニケーションを育む、教育と医学、慶應義塾大学出版会、4.1999.
- 14) 藤崎和彦:模擬患者によるコミュニケーション教育、Quality Nursing 7(7)4-12.2001.
- 15) 市丸順子:『採血』技術演習における学生の修得状況に関する研究、県立長崎シーボルト大学 看護栄養学部紀要 創刊号 49-56、2000.
- 16) 柏倉栄子,他:看護学生の学内および臨地実習における看護技術の経験の有無と自信の程度、東北大学医療技術短期大学部紀要 10(2):91~99、2001.

Considering the Significance and Effect of Employing Intramural Study during the Nursing Practicum for Adult Care

HATAKEYAMA Yoshiko HATAMOUCHI Chieko OBI Tomoko FURUYA Yoko
NAKAZAWA Tomie TOSAKA Yuko ONO Kyoko

ABSTRACT

Practical training in the nursing education is to practice by unifying and applying the knowledge of nursing which studied within the campus to the clinical unit, and is positioned as an important subject for studying nursing. Students will subjectively think and act one by one, and will train their judgment, practical skill, and problem solving capability as a competent nurses. In today's clinical place, most patients shows serious and acute symptoms as medicine has higher technology. And also, we need up-to-date information on insurance and welfare for the early discharge from hospital. Thus, we have to cope with some complicated situations for teaching nursing. Meanwhile, in these situations the students need to acquire such high technology rapidly and properly. In order to increase the learning effect, we decided to perform the intramural practicum in the middle term of their practical work in hospital. This aim is to reconsider the significance of the practical work when they start understanding how the nursing is, and is to solve their own problem.

We considered the significance and effect of the intramural study based on the questionnaires of the students and teachers. The result was as follows;

1. As the intramural study topics in the middle of the practical training reviewed the first half training so far and dealt with the solutions to face toward the last half training, approximately 80% of students evaluated as effective.
2. Review of nursing skill prior to the practice leads to cancel the uneasiness and to higher the volition toward the experiences at the practice site. However, the enforcement rate is still low and it is necessary to re-consider the education contents for nursing skill in the future practical training.
3. It was suggested that covering some contents of the intramural study prior to the practical training became more effective. From now on, we believe that it will be effective by combining the intramural study and the practical training to generate organic effect, including a preparation period to mainly review the techniques before entering in the practical training, moreover reserving a time to review the first half training and a time for problem solving.
4. The teachers should encourage the students to learn the intramural study to make use of it in their practical training. Moreover, it is important that the teachers should support their additional study in school when required, especially for the students who are not sure to deal with their skill alone.

Keywords: practical training, intramural study, nursing practicum for adult care